



「心あてに 折らばや折らむ 初霜の 置きまどはせる 白菊の花」 (凡河内躬恒)



(無造作に折ろうとすれば、果たして折れるのだろうか。初霜が一面に降り、咲いている白菊の花とは見分けもつかなくなっているというのに)

11月の半ばになり、深まる秋を感じます。冬がすぐそこに来ているようです。もう山中では、霜が降りたところもあるのでしょうか。上記の句は百人一首に選ばれている有名な句です。

凜とした気持ちになれる歌ですね。

好奇心

先月10月5日に、2021年のノーベル物理学賞の発表があり、日本の真鍋淑郎さんが受賞されたことは、みなさんもご存知のことでしょう。このような素晴らしい賞を受賞されたこと、日本人として大変誇らしく思うのは私だけではないでしょう。

日本のノーベル賞受賞者は第1号の湯川秀樹さんから始まり、真鍋さんで28人目になります。ちなみに、戦後、日本の受賞者数は、世界4位で、今世紀に入ってから、米国に続く第2位となっています。このことは本当に凄いことなのではないでしょうか。

ノーベル賞を受賞するということは、世界トップの研究や実績、そして人類への貢献等の結果です。そのような偉業を成し遂げることができる人は、どのようなことを子どもの時から考え、どのような取組をしたからなのでしょう。

本人や同僚などの発言から考えてみましょう。(新聞に載っていた記事から)

- ・「私は研究を心から楽しんでいたし、ただ好奇心が私を研究に駆り立てた」(本人)
- ・「自分は頭が切れるというのではないが、人が合点したことでも『待てよ』とくどいほど考え続けることが、結果としてうまくいった」(本人)
- ・「記憶力は悪いし、手はぶきっちょ。空を眺めて物思いにふけるくらいしか取りえがないと思った」(本人)
- ・「とことん考える人で、時間も忘れて議論した」(研究仲間)
- ・「大きな視点と小さな視点を併せ持つと共に、とても若い研究者にも優しい人だった」(研究仲間)

真鍋さんがノーベル賞の受賞という偉業を成し遂げられたキーワードは「好奇心」のように思われます。簡単に言えば「おもしろそうだ」(真鍋さんにはちょっと失礼な言い方かもしれませんが・・・)と感じたことに徹底して取り組んだ結果だと言えるのではないのでしょうか。おもしろそうに思えることに、「なぜだろう」「どうしてだろう」という、疑問をもち、その解明のために徹底的に取り組まれたことが偉業に繋がっていったのでしょう。子どもは誰でもみんな好奇心をもってきます。大人以上でしょう。子どもの時にもった好奇心をいつまでももち続け、育てていくことを支援してやることは親や大人の責任ではないのでしょうか。